

分の日を挟んだ連休明けの三月二十二日、朝の管理会議で意思統一を行い、夕方に臨時医局会を開催、被災地への医療支援に全力を挙げることを確認した。

離島の小さな病院と医師会なので出来ることも限られているが、少なくとも一ヶ月は継続して支援したいと考えた。人数も少ないので二チームで一週間を担当してもらうことにした。現地での活動に空白が生じるが、新潟での引き継ぎを前提に計画した。しかし、現地の引き継ぎが必須とのことで急遽計画を変えた。そのため、移動日を含めて木曜日出発チームは四泊五日、日曜日出発チームは五泊六日という強行日程になってしまった。チーム構成は医師一名、

看護師二名、薬剤師一名、事務一、名々の五名だが、参加員も非常に多かった。ながら薬剤師の参加は非常に役に立った。研修医も行ったような顔をみせていたが、荷物を満載したワゴン車にはそれ以上乗せることが出来ず、残念ながら諦めてもらった。現地に病院の車を一台常駐させ、往復はレンタカーを使った。寝袋や毛布などは二チーム分ずつ用意したが、宿泊先が確保できたので寝袋を使うことはほとんどなかった。ガソリンや食料品、水は品薄制限だったが確保には困らなかった。春の

性上気道炎や慢性呼吸器疾患の増悪、感染性腸炎、高血圧症などの診療が多かった。南地区の救護班幹事は兵庫県医師会が担っていたが、数日間隔で小児科、眼科、皮膚科の各医師を組織しており、避難所に連絡し予約を取っての巡回診療はありがたがられていた。

事務 復興への兆し
この地区の医療機関は壊滅状態だった。師たちは高台に仮設診療所を開いて外來の一部を再開しようとしていた。また、避難所となった学校

る総務課員が手分けして行っていた。名前入りのユニフォームが準備できず、手書きのゼッケンを持つて行つてもらったが、他のチームに比べて貧弱で、しばしば出没する偽医師と間違えられそうだった。幸い、新潟県チームのジャケットを借りることができ、これを引き継ぎながら使わせてもらった。携行する医薬品や診療器具のリストは薬剤部長と看護部長が担当した。

こうした準備を進め、三月二十七日、福島県出身のS医師を中心とする第一班を見送った。医師の三分の一が入れ替わり、二十人を超す新人看護師を迎える年度替わりになった。第二班は組むことが出来なかった。その後、第三班から八班まで大きな事故もなく任務を遂行することができた。この間に、震度五強の揺れで、寝たから浴びる程度のことはあったが、危惧された津波を伴うような余震はなかった。救護に行つたチームが被災すること程悲劇はない。何より無事に任務を遂行できたことがよかった。

紙面の関係で、活動の詳細を記すことはできないが、もう少し復旧が進んだ時点で報告会などが開かれることを期待している。

石巻市の避難所でプライマリイシューを話し合っている。石巻市は四月十九日まで日本医師会のIMA（新潟）新潟市医師会チームとして、

東日本大震災に対して 医療支援活動を行って

新潟大学大学院医歯学総合研究科総合地域医療学講座

井口 清太郎



東日本大震災に対する初動については、別稿に詳細を譲り、私は新潟大学が三月二十五日以降

に開始した岩手県宮古市への医療支援について報告します。発災から二週間が経過し、新潟県内における後方支援が一段落した三月二十五日より新潟大学医歯学総合病院として現地に対する医療支援が開始されることとなり、私はその第一陣として現地に出発しました。岩手県を選んだ理由は、文部科学省から要請があったこと、初動で出動した本学DMATが岩手県宮古市での稼働実績があり、現地の様子がある程度分かっていたことなどです。

第一陣は医師二名、看護師二名、薬剤師一名、事務一名の計六名で、救急車一台を含む二台の車両で向かいました。現地でのライフライン、医療状況、食糧事情などの情報が

した。また保健師常駐化については現地の担当部署より迅速に対応してもらい、我々第一陣が引き上げる頃にはすべての避難所に保健師が常駐する体制に移行しつつありました。

避難所では「中越地震・中越沖地震のあった新潟から少しでも恩返しのため」でやって参りました。最初には「アウンス」として被災者にも親近感を持って頂けたのか、多くの方が診察にいられた。血圧の測定や、避難所で行い始めていた流行性角結膜炎の予防指導などたくさんの方がありました。外傷は少なく、むしろ保健医療活動のニーズがあるように感じました。ある避難所では退院するとき、盛大な拍手を頂き、医療支援に来ていた我々自身が元氣付けられて、胸が熱くなりました。新潟大学は三月二十五日に岩手県宮古市入りして、その後四月三十日まで、病院全体をあげてのバックアップ体制の中、延べ人数で七十七名の医師、看護師、事務薬剤師が現地入りし、医療支援を継続することができました。また我々の医療支援活動をサポートするたのめ後方支援など、多くのスタッフに支えられて今回の活動を継続することができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

被災地から学ぶ 「こころのケア」

河渡病院 非常勤医師 勝井 丈美

私は四月十七日から十九日まで日本医師会のIMA（新潟）新潟市医師会チームとして、

ねてこないのだそうだ。「こころ」という言葉に対して、むしろ警戒心をもっており、下手なこと言つて病氣と診断されたら怖いと感じていたようだ。それで、あえて「こころのケア」の看板を出さずに、一般医療班に同行する形をとった医師もいて、かえってその方がプラクティカルであった。外から現地へ入って行くボランティアは、何であれ、まず被災者に受け入れられなければ、実のあるサポートはできない。

最近、「こころのケア」による



石巻市の避難所でプライマリイシューを話し合っている。石巻市は四月十九日まで日本医師会のIMA（新潟）新潟市医師会チームとして、

ルマツサージをしてあげた女性から、三陸わかめのお惣菜をごちそうになった。三日間往診した高齢者グループホームでは、お礼だと言つて『北国の春』をみなさんで歌つてくださり、畑から摘み取ったイチゴも頂いた。こうした暖かな心の交流ができたことが、支援者としては一番嬉しく、出会った被災者一人一人のことが今も深く印象に残っている。テレビに石巻が写るたびに、あの人たちは今どうしているかしらと気になる。どうにかお元気で、と祈らずにはおれ